

カモ目カモ科

ヒシクイ

Anser fabalis (Latham, 1787)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

本種の集団渡来地は東日本に片寄っており、それも局地的である。琵琶湖より西の集団渡来地は斐伊川だけで、ここに渡来するヒシクイは体サイズがやや小さい個体が多く、中にはマガンと同サイズの個体も見られる。さらに、亜種オオヒシクイと考えられる大型の個体も数割含まれる。東日本に渡来する個体群とは、繁殖地や渡来ルートが異なる可能性が高く、2010年4月には日本海を北上して大陸へ直接渡るルートが確認されるなど、学術的にも注目されている。マガンの個体数が急増しているのに対し、本種は100羽前後で増減し、増加しない状態が続いており、生息基盤も脆弱なことから県内における絶滅が危惧される。

【概要】

1971年に国の天然記念物に指定され保護されてから、その数が回復傾向にあるが、渡来地は局地的。現在国内には東北地方を中心に約18,000羽が渡来している。国内

に渡来するヒシクイを亜種レベルで見ると、タイガ地帯をおもな繁殖地とする亜種オオヒシクイと、ツンドラ地帯をおもな繁殖地とする亜種ヒシクイの2亜種が渡来しており、亜種オオヒシクイが約12,000羽、亜種ヒシクイが約6,000羽である。

【県内での生息地域・生息環境】

集団で定期的に渡来するのは、斐伊川中流から下流部のみで、ねぐらや餌場はおもに斐伊川の河川敷内で、中州をねぐらとし牧草やツルヨシの根などを餌としている。また、周辺の水田で餌をとることもある。この他、斐伊川下流部ではマガンやコハクチョウと行動を共にする個体も1～数羽見られる。

【存続を脅かす原因】

河川改修などの生息環境の改変、湿地などの餌場の消失・環境悪化など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
◎	○	○	○												○	○	○				△

カモ目カモ科

カリガネ

Anser erythropus (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

【選定理由】

斐伊川河口部を中心に、近年毎年渡来しているが、渡来数は少ない。毎年のように複数個体の渡来が確認されている地域は、宮城県などを除けばまれであり、その動向を注目していく必要がある。

【概要】

全長58cm、翼開長128cmのガンの仲間で、マガンより一回り小さい。マガンによく似ているが、嘴が小さくて短く、ピンク色味が強い。成鳥では額の白色部が頭頂の眼と眼を結ぶ線まで達しており、眼を取り巻く黄色いリングがある。鳴き声はマガンより調子が高い。ユーラシア大陸の極北部で繁殖し、中国南部、ハンガリー、カスピ海周辺で越冬する。総個体数は全世界で3～5万羽と推定されており、生息環境の悪化や狩猟の影響などでヨーロッパでも絶滅の危機にあるといわれている。1997年に中国と日本雁を保護する会の共同調査で、中国湖南省にある洞庭湖に13,700羽が確認され注目された。国内

には、ごくまれな冬鳥としてマガンに混じって渡来するが、毎年渡来している地域は限られている。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖とその周辺に渡来する約4,000羽のマガンに混じって、近年は、ほぼ毎年1～数羽が観察されている。餌場やねぐらはマガンと同じで、おもに出雲平野の刈り取り後の水田を餌場とし、宍道湖の湖面や斐伊川の中州をねぐらとしている。これまでに本種が確認されたのは、宍道湖西岸の斐伊川河口部が多いが、ほかに潟の内の記録などがある。

【存続を脅かす原因】

秋耕や裏作などによる水田の餌場環境の悪化、中州や水面などのねぐら環境の不安定化など。また、近年では撮影者などによるストレスも懸念される。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
◎			△												○	○	○				

カモ目カモ科

オオハクチョウ

Cygnus cygnus (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本県では、従前からコハクチョウに比べ渡来数がきわめて少なく、渡来状況も不安定であることから、動向を注意深く見守っていく必要がある。本種は、マコモが生息している水辺などを好む傾向があるが、そのような生息環境は限られており、水田をおもな餌場としているコハクチョウに比べると、生息基盤が不安定である。

【概要】

国内に渡来するハクチョウ類は、主としてオオハクチョウとコハクチョウの2種で、平成24年度の環境省のガンカモ類生息調査のデータによると、オオハクチョウが約27,000羽、コハクチョウが約40,000羽渡来している。本種は、コハクチョウより一回り大きく、全長約1.4m、翼開長約2.2mで、わが国に生息する鳥類の中でもっとも大きいものの一つ。コハクチョウよりも嘴の黄色部が広く、その先端が三角形にとがり黒色部に食い込むのが特徴。繁殖地は、ユーラシア大陸のタイガ地帯で、コ

ハクチョウが繁殖するツンドラ地帯よりも南部に位置する。日本には冬鳥として渡来し、越冬地は東日本がほとんどである。

【県内での生息地域・生息環境】

県内に渡来するハクチョウ類の大半はコハクチョウで、本種はコハクチョウの群れに1～数羽が混じり、水田で採餌することが多いが、ファミリー単位で渡来することがまれにある。宍道湖西岸の斐伊川河口部や安来平野のほか、隠岐諸島などで観察されることがある。県内では、神戸川河口部には、以前連続して10羽ほどの個体群が渡来していたが、河川工事の影響などから最近では見られなくなった。

【存続を脅かす原因】

河川工事などによる生息環境の悪化、マコモなど餌の減少など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
◎	○	○	○								△				○	○	○				○

カモ目カモ科

アカツクシガモ

Tadorna ferruginea (Pallas, 1764)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：情報不足 (DD)

【選定理由】

本県は、朝鮮半島と近い位置にあることなどから、本種が渡来することが多い。特に、斐伊川河口部一帯には毎年のように渡来していたことがあり、貴重な地域となっている。本県は、地理的条件などから、中国大陸の奥部に繁殖する本種の定期的な渡来地として注目されていたが、近年は不安定な渡来状況が続いている。

【概要】

全長約64cmで、ツクシガモとほぼ同大の大型のカモ。全身キツネ色で、嘴と脚、尾羽と翼の先端が黒く、翼を広げると白と黒のコントラストが美しい。オスには頸部に黒色の輪があるが、メスにはない。黒海沿岸からバイカル湖以東までのユーラシア大陸中部に広く分布し、モンゴルやチベットなどで繁殖した個体が、朝鮮半島や国内に冬鳥として渡来する。朝鮮半島には群れで渡来し個体数も多いが、国内に渡来することはまれで、個体数もきわめて少ない。

【県内での生息地域・生息環境】

これまで、斐伊川河口部を中心に、宍道湖や中海の周辺、神西湖、隠岐諸島など数カ所で確認されている。渡来したほとんどの年は、1～数羽の記録であったが、1987年には斐伊川河口部に10羽の群れが渡来したことがある。その後、毎年のように見られていたが、2004年度以降は不安定な渡来状況が続く、記録がない年もある。ねぐらや休息場は河口部の砂州、餌場は周辺の水田を利用している。斐伊川河口部では、水田に飛来し落ち穂や青草などを採食する姿をよく見る。群れで渡来したときは独自で行動することが多いが、1羽の場合にはマガンの群れと行動を共にすることが多い。

【存続を脅かす原因】

生息環境の悪化やカメラマンによる追いかけなど。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
◎	△	△	○												○	○	○				△

鳥類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

ペリカン目サギ科

ミゾゴイ

Gorsachius goidagi (Temminck, 1836)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

日本列島で繁殖する固有種。生息状況など不明な点が多いが、減少傾向にあると考えられる。情報の集積や調査が望まれる。

【概要】

全長約49cm。全体が栗色で、頭頂は濃い栗色、背中は暗栗褐色で、体の下面はパフ色で中央部に栗色の縦縞があり、のどにも黒い縦線がある。雌雄同色。本種は、おもに夏鳥として渡来し、低山や丘陵地のスギ、ヒノキなどの針葉樹やクリ、ナラ類などの落葉広葉樹、あるいは針広混交林の良く繁った樹林に生息する。沢筋や谷間の溪流などでサワガニやミミズ、魚類などを捕食する。丘陵地の谷戸田のような里山の環境が生息に適していると考えられる。おもに夕方から夜間にかけて、あるいは雨や曇りの日の日暮れから数時間と夜明け前の数時間、「ポォー ポォー」という低い声で鳴くとされる。樹上に皿形の巣をつくるが、コロニー性はなく、つがいごとに

分散して繁殖する。このように、開けた場所でないところで単独行動するために観察される機会は少ないと考えられる。冬季は、フィリピンおよび台湾を含む中国南部などで越冬するほか、一部は南西諸島や種子島などで越冬する。

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として4月上旬から中旬に渡来する。県内では西部を中心に繁殖も確認されているが、観察記録はきわめて少なく、生息状況や分布はほとんどわかっていない。

【存続を脅かす原因】

森林の開発や伐採、林相の変化などによる生息適地の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	△		△	△	○		○	○	○	○			△	△				

ペリカン目トキ科

クロツラヘラサギ

Platalea minor Temminck et Schlegel, 1849

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

【選定理由】

東アジアに局地的に分布する種で、学術的にも貴重である。生息環境の減少も深刻で、国際的に保護対策が必要とされている。

【概要】

全長約70-80cm。全身が白く、しゃもじ形の長い嘴は全体に黒い。ヘラサギに似ているが、目先は黒い皮膚が露出している。夏羽は胸に黄色味があり、後頭に冠羽がでるが、冬羽にはない。幼鳥や若鳥は、風切の先端と外側初列風切は黒く、飛翔時に目立つ。朝鮮半島北西部と中国東北部などで繁殖し、台湾、香港、中国、ベトナム、日本などで越冬する。2013年のクロツラヘラサギ世界一斉調査では、2,725羽が確認され、国内では277羽が記録されている。以前はまれな冬鳥であったが、近年は、九州と沖縄が主要な渡来地となり定期的に越冬している。冬鳥または旅鳥として渡来するが、越夏する個体もあり、その場合は若齢個体であることが多い。干潟、水田、河

川、湖沼などの湿地に生息し、嘴を半開きにして水の中に入れ、横に振りながら、魚類や甲殻類などを捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内には干潟のような湿地環境がほとんどないが、冬季または渡りの時期に見られる。斐伊川や飯梨川、益田川、高津川の河口部などで観察例がある。斐伊川河口では、一時的な滞在であることが多いものの、毎年のように渡来しており、夏季の記録もある。1羽で観察されることが多い。

【存続を脅かす原因】

湿地開発、河川改修などによる生息適地の減少（特に広くて浅い湿地環境の消失）など。有害化学物質の蓄積も懸念されている。最大の越冬地である台湾ではボツリヌス菌による大量死が起きたことがある。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	△	○	○												△	○	○				○

ツル目クイナ科

クイナ

Rallus aquaticus indicus Blyth, 1849

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種(亜種)は、草原などの茂みの中に潜んでいることが多く、観察されにくいことから、生息状況が十分に把握されているわけではないが、個体数は多くないと考えられる。また、生息場所である水辺の草原などが減少しており、生息基盤が脆弱である。

【概要】

全長29cm。キジバトより少し小さく、体色は地味な褐色である。長い嘴は下嘴が赤く、腹部に白と黒の横縞がある。顔には褐色の過眼線があり、眼も赤色。脚は長く、尾は短い。種としてはユーラシア大陸の温帯・亜寒帯などで繁殖し、北方のものは冬季南下する。国内では本亜種が北海道と本州北部で繁殖し、冬は本州中部以南に移動する。湖沼などの水辺の草原やヨシ原、水田や休耕田などに生息するが、半夜行性で、草むらに生息するため、姿を見ることは容易ではない。朝夕には草むらの周りで餌をとることがある。湿地を歩いたり泳いだりしながら、

昆虫類、両生類、魚類、甲殻類などの動物質のほか、草の種子なども食べる。警戒心が強く、ちょっとした物音などにもすぐ反応して隠れる。単独あるいはつがいで生活し、雛を連れて育てている時期以外は群れをつくることはない。なわばり意識は強く、繁殖地でも越冬地でも一定の範囲を縄張りとして構え、他の個体が侵入してくると追い払うという。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として水辺の草原やヨシ原などで観察される。宍道湖西岸や潟の内、飯梨川や益田川周辺などで記録がある。

【存続を脅かす原因】

生息状況などに不明な点も多いが、水辺の草原やヨシ原、水田などの生息適地の減少が考えられる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○							○	○	○			○	○	○				

ツル目クイナ科

ヒクイナ

Porzana fusca erythrothorax (Temminck et Schlegel, 1849)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

本種(亜種)は、草原などの茂みの中に潜んでいることが多く、観察されにくいことから、県内の生息状況が十分に把握されているわけではないが、個体数は多くないと考えられる。また、生息場所である水辺の草原などが減少している。

【概要】

種としてはインドから東南アジア、中国、朝鮮半島にかけて分布する。全長約23cm。ムクドリくらいの大きさで、体の上面は暗緑褐色。顔から胸にかけて赤茶色。嘴は黒っぽく、脚が赤い。本亜種は夏鳥として九州以北に渡来して繁殖するほか、本州北部以南では少数が越冬する。河川や湖沼のヨシ原、水田などに生息する。非常に警戒心が強く、日中はほとんど姿を現さないが、雨の日などには日中に姿を見かけることがある。飛ぶときには、両脚を下げ、頸を伸ばして低空を直線的に飛ぶ。餌はおもに動物質で昆虫類が多く、両生類や草の種子も食べる。

繁殖期には、おもに夕方から夜にかけて「キョッキョッキョッキョッキョ」と金属的な声で連続的に鳴く。水辺の草の中に、イネ科植物、ヨシなどの葉や茎を利用して皿形の巣をつくる。雛は早成性で、孵化後まもなく巣を離れ、親に連れられて歩く。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに夏鳥として渡来し、宍道湖西岸や潟の内、益田川河口などで観察記録があるほか、冬季の記録もある。観察されにくく、県内の生息状況については、よく分かっていないのが現状である。

【存続を脅かす原因】

生息状況などに不明な点も多いが、水辺の草原やヨシ原、水田などの生息適地の減少などが考えられる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○							○	○	○			○	○	○				

鳥類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

ヨタカ目ヨタカ科

ヨタカ

Caprimulgus indicus jotaka Temminck et Schlegel, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

県内の生息状況が十分に把握されているわけではないが、近年急に個体数が少なくなってきたと思われる。本種（亜種）の好む環境が急激に少なくなってきたことも一つの要因と考えられる。

【概要】

全長約29cm。全体に褐色で、灰色や茶褐色などの斑紋が混じった複雑な模様をしている。嘴は小さいが根元の方が幅広く、扁平で、口を開けると非常に大きい。種としては中国から極東アジアに分布し、北方のものは冬、南へ移動する。国内には本亜種が夏鳥としておもに山地に渡来する。草原帯のある広大な山林地域を好み、草原や灌木の散在する落葉広葉樹や針葉樹の森林に生息する。おもに林縁や明るい林の地上に浅いくぼみを作り産卵する。日中は林内や林縁の大きな枝に平行にとまっていることが多く、一見木の瘤のように見える。体の模様が地上に落ちた枯れ葉のようで、じっとしているときは

姿を見つけることが難しい。夕方から夜にかけてと明け方に「キョキョキョキョキョ」と連続して鳴くために、存在に気づくことが多い。長い翼でゆっくり羽ばたいて飛び回るが、飛翔スピードは速い。飛びながら飛翔性の昆虫類を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地のほか、本種の好む環境があるところでは、海岸に近い山でもまれに鳴き声を確認することがある。しかし、夜行性であるため観察されにくいこともあり、県内の生息状況や分布については不明な点が多い。県西部では、山地の伐採地で繁殖が確認されたことがある。

【存続を脅かす原因】

森林の開発や林相の変化などによる生息環境の減少、中継渡来地や越冬地における環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○	○			○	○												

チドリ目タマシギ科

タマシギ

Rostratula benghalensis benghalensis (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

本種（亜種）の県内の生息状況は十分に把握されていないわけではないが、個体数は少ないと考えられる。また、本種が生息するような湿地環境の減少に伴い、生息数が減少していく可能性がある。

【概要】

全長約24cm。目の回りの曲玉模様と胸から背中に走る白線がよく目立つ。メスは卵を産むだけで、巣づくりや抱卵、子育てはオスが行う。一妻多夫という繁殖習性を持っている。メスの方が額から胸にかけて赤褐色の美しい羽色をしており、繁殖期には「コーコー」と連続して鳴く。種としては中国南部からインドまでのアジア地域と、アフリカ大陸、オーストラリアにかけて分布する。国内では、本亜種が本州中部以南の水田、休耕田、蓮田、湿地などに周年生息し、稲の株の間、畦道の上、湿地の草地の中などに巣をつくる。巣をつくる場所は、背丈が低い草（15cmくらい）がまばらに生えたところで

あるという報告がある。越冬できるような年中浅く冠水している場所では周年生息している。成鳥は繁殖期にはほとんど群れをつくらないが、秋から冬にかけては群れをつくる傾向がある。餌はおもに動物質で、ミミズや昆虫類を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに平野部の水田地帯などで観察記録がある。繁殖期には鳴き声で確認されることも多い。

【存続を脅かす原因】

巣をつくるのに適した場所として、耕したまま放置した水田や埋め立て地のように一時的にできた草地があるが、このような場所は安定して存在しない。また、乾田化が進むなど生息適地が減少していることが考えられる。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	△	○	○							○	○	○			○	○	○				

チドリ目カモメ科

コアジサシ

Sterna albifrons sinensis Gmelin, 1789

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

本種(亜種)は、かつては本州以南の各地の水辺で繁殖していたとされるが、近年では全国的に繁殖地が危機に瀕しているところが多い。近年の県内の記録は渡りの時期であり、旅鳥と見られるが、繁殖地が確認できれば、その保護を図る必要がある。

【概要】

全長26cm。全体的には白っぽい小型のアジサシ類。黄色い嘴で、額が白く頭部が黒い。本亜種は中国南部からフィリピン、オーストラリアまで分布する。国内には夏鳥として本州以南に渡来する。海岸、河川、湖沼などの水辺に生息し、水面上をゆっくり飛んで、時には停空飛翔をしながら、ダイビングして小魚を捕食する。繁殖適地は小石混じりの乾燥した裸地であり、砂浜海岸や、河川の河原や中州、埋め立て地などの砂礫地を利用して集団で繁殖する。しかし、砂浜や河川敷など自然の繁殖地は減少しており、人工的に造成された場所で繁殖するこ

とが少なくない。また、埋め立て地では工事の進行にともなって適地が失われることから、本種の営巣環境は不安定な状態にある。さらに、その他の要因として、卵や雛がカラス類などの捕食者によって捕食されたり、河川敷では梅雨時に増水することで流失したりするほか、人や車が砂浜や河原に立ち入ることで営巣地の放棄を招くことなどがあり、繁殖成功率は高くないとされる。

【県内での生息地域・生息環境】

過去には飯梨川河口などで繁殖行動の記録があるが、現在は県内での繁殖は知られておらず、宍道湖・中海や河川の河口部などの水辺でもに渡りの時期に観察されている。

【存続を脅かす原因】

安定した繁殖適地の減少や、レジャー等による人の立ち入りなど。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	△	○	△												△	○	○				○

タカ目ミサゴ科

ミサゴ

Pandion haliaetus haliaetus (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

本種(亜種)は、魚類をおもな餌とするタカで、海岸部や湖沼周辺を中心に県内に広く分布しているが、営巣地など本種を取り巻く環境が年々悪化してきている。中でも、営巣木として利用してきたマツの大木が、松くい虫のため枯死することが多く、深刻な状況にあるほか、餌としている魚類に蓄積した有害化学物質の取り込みに伴う影響も危惧される。沿岸・湖沼・河川部における生態系の頂点に立つ生物で、その環境指標ともなる種であるが、繁殖成功率が高いとはいえない状況にある。

【概要】

本種は広く世界中に分布する。国内には本亜種が留鳥として生息し、全長55-65cm、翼開長は170cmにも及ぶ。トビよりも翼が細長く、本種の方がスマートである。全体的に白っぽく、日本産のタカ類ではもっとも白く見える。空中で停空飛翔を行い、急降下して水中にいる魚を脚の爪で捕らえる。水上に突き出た杭の上などで、捕ら

えた餌を食している姿がよく見られる。巣は、海岸部の切り立った崖の先端部に作ることが多かったが、近年は大木の樹上にかけることが多くなった。さらに、近年、営巣木不足から、送電鉄塔など人工の構造物に営巣することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、海岸や湖沼部を中心に広く生息しており、その生息密度も全国有数の高密度地域と考えられる。特に、中海・宍道湖や神西湖周辺における個体密度が高く、隠岐諸島でもよく見られる。河川沿いに内陸部まで入り込むことがあり、ダム湖など山間部の水域でも見られる。

【存続を脅かす原因】

松くい虫による営巣木の枯死、釣り人などの海岸営巣部への接近、餌場環境の悪化、有害化学物質の体内蓄積など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	崖地
○	○	○	○	○		△	△	○			○	○	○			○	○	○			○	○

鳥類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

タカ目タカ科

オジロワシ

Haliaeetus albicilla albicilla (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

本種(亜種)は北海道以外では珍しく、本県にはまれな冬鳥として渡来する。以前は、宍道湖西岸部に毎年のように渡来し越冬していたが、近年はその姿を見ることが少なくなった。

【概要】

その名のようにくさび型の白い尾を持ち、豊のように幅の広い翼を持つ褐色のワシ。全長69-92cmで、翼開長は2m以上にも及ぶ。少数が北海道の東部と北部の海岸に近い森林や、内陸の湖沼周辺の森林で繁殖している。北海道の営巣地は、やや増加傾向にあるが、繁殖は必ずしも安定していない。冬季、ロシア極東部などで繁殖した個体も渡来し、北海道や本州北部を中心に越冬する。関東以西ではまれで、特に西日本では渡来数も少ない。国内における越冬個体数は550~850羽とされているが、近年風蓮湖では1,000羽ほどが確認されるなど、渡来数は増加傾向にある。魚類をおもな餌とする海ワシで、巖

冬期には水禽類や乳類なども餌とする。海岸部や湖沼、大河川の河口部などでよく確認される。おもな繁殖地は、ロシアのカムチャツカ、サハリン、沿海地方などであるが、北海道東・北部などで約150つがいが繁殖している。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として渡来し、宍道湖西岸部や神西湖などで比較的良好に見られる。魚類をおもな餌としているが、時にはカモ類を捕獲することもある。宍道湖の場合、斐伊川河口部の中州を休息場としてよく利用し、ねぐらは北部の山林地帯を利用することが知られている。

【存続を脅かす原因】

休息場などへの人の立ち入り(特にカメラマン)、ねぐらに利用していた大木の消失、有害化学物質の体内蓄積など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	△	△	○										○			○	○	△			○

タカ目タカ科

チュウヒ

Circus spilonotus spilonotus Kaup,1847

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

【選定理由】

本種(亜種)は、湿地生態系における食物連鎖の頂点に位置し、その生物多様性の豊かさを象徴する種の1つである。以前は、斐伊川河口部を中心に多くの渡来がみられ、繁殖の可能性もあったが、近年では渡来数が減少した。渡来地も限定されており、絶滅が危惧される。

【概要】

オスは全長約48cm、メスは約58cm。翼と尾と足が長め。羽色に個体差が多く、国内で繁殖する個体はトビのような褐色味のある個体が多い。オス成鳥は翼先が黒っぽく、風切り羽と雨覆に黒っぽい黄帯がある。種としては、シベリア東部、モンゴル、中国東北部などで繁殖し、中国中南部、東南アジアなどで越冬する。国内にはおもに冬鳥として渡来するが、北海道、東北、中部地域で少数が繁殖しており、岡山県、山口県でも繁殖が確認されている。ヨシ原や平野部の草原、農耕地などに生息し、日中はヨシ原や草地の上をゆっくりとした羽ばたきと滑空を

繰り返しながら、ネズミや小鳥類、カエルなどの小動物を捕食する。翼をV字型に保って、低空を滑翔するのが特徴。営巣は、水のあるヨシ原の中で行う。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、河川や湖沼の広いヨシ原や農耕地などに渡来し、斐伊川河口部などでは冬季を中心に常時数羽から5羽程度の飛翔が確認されていたが、近年は激減してきた。斐伊川流域では、まれに夏季の観察例があり繁殖の可能性もあったが、繁殖は確認されていない。

【存続を脅かす原因】

湿地開発による生息地の減少(特に広大なヨシ原のある湿地環境)、生息に適した草地や餌場(植生のギャップ地など)、ねぐらの減少、植生の自然遷移など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○		△				○					○	○	○	○		○		○

フクロウ目フクロウ科

オオコノハズク

Otus lempiji semitorques Temminck et Schlegel, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

以前は、中国山地などで確認されることがあったが、最近ではほとんど見られなくなった。猛禽類である本種(亜種)は、豊かな森の象徴であり、本種が生息することは豊かな自然環境が残存している証ともなる。しかし、もともと個体数もさほど多くなく、その動向を注意深く見守っていく必要がある。

【概要】

種オオコノハズクの分布は、日本のほか、ウスリー地方、中国東北部、サハリン、台湾、フィリピン、インドシナ半島などと広い。全長24cmくらいで、コノハズクより少し大きく、耳羽が長い。眼は橙色で、金色の眼をしたコノハズクと見分けられる。県内には本亜種が留鳥として周年生息する。コノハズクよりも局地的で定着性が強いと言われている。夜行性であることや、鳴き声あまり目立たないことなどから生息確認が難しい種である。平地や山地の豊かな森に棲み、社寺林や竹藪、針葉

樹の密生林内などで確認されることが多い。冬季は暖地に移動することがあり、民家の周辺で観察されることもある。夕方から活動し、小鳥類や小型哺乳類、両生類、昆虫類などを捕食する。鳴き声は「ポッポッポッポ」または「ホッホッホッホ」という低い声で、「キュリー」という声も出す。このほか「テイヤーオ」という声は一年中発する。5～6月頃、巨木の樹洞や民家の屋根裏などで繁殖する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島や中国山地などの豊かな森に生息し、まれに確認される。近年では、島根半島(北山山系)で繁殖が確認されたことがある。

【存続を脅かす原因】

森林の開発、営巣木となる大木のある森林の減少など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○				○													

フクロウ目フクロウ科

コノハズク

Otus sunia japonicus Temminck et Schlegel, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

「声の仏法僧」としてよく知られた鳥で、以前は中国山地などで比較的好く鳴き声が聞かれたが、最近ではほとんど聞かれなくなった。猛禽類である本種は、豊かな森の象徴であり、本種(亜種)が生息することは豊かな自然環境が残存している証ともなる。しかし、もともと個体数もさほど多くなく、本種が好む自然環境の減少などから、各地から姿を消しつつある。

【概要】

全長約20cmの小型のフクロウの仲間で、国内でみられるフクロウ類では最小。よく目立つ耳羽や、枯れ葉模様の外観、金色の眼などが特徴。体色に個体差があり、全身赤褐色の赤色型が比較的好く見られる。中国南部やインド、タイ北部、ベトナム北部などでは留鳥。マレー半島、ミンダナオ島などで越冬することが知られている。県内には本亜種が夏鳥として渡来し、5～6月ごろ樹洞内で産卵する。日中は森の中の枝の上や樹洞にいて、じっと

していることがほとんどである。夕方から活動し、オサムシやゴミムシ、ガ類などの昆虫類を捕食する。5月から8月上旬にかけて、夜間「ブッ キョッ キョー」と聞こえる三音を連続して鳴くことから、「姿のブッポウウ」に対し「声の仏法僧」と呼ばれている。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地脊梁部のブナ帯を主とする豊かな自然環境が残存する森林に、わずかに生息している。安蔵寺山など西中国山地一帯には、良好な自然環境が残存しており、本種の鳴き声が比較的好く聞かれる。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、営巣木となる大木の減少、越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○				○													

ブッポウソウ目カワセミ科

アカショウビン

Halcyon coromanda major (Temminck et Schlegel, 1848)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種(亜種)は、夏鳥として渡来するが、その数は少なく、観察される地域も限られている。繁殖に利用する古木なども減少しており、渡来数の減少が危惧される。

【概要】

全長約27cmのカワセミ科の鳥類で、長く大きな嘴が特徴。「炎の鳥」と呼ばれるように、体の大部分は黄褐色を帯びた赤色を呈している。下面は黄色みの強い赤で、脚も赤い。腰にわずかに瑠璃色の羽毛がある。長い嘴は赤くて太い。冬季は台湾、フィリピン、セレベスなどで越冬し、国内には夏鳥として渡来する。山地のよく茂った落葉広葉樹林内の沢筋や溪流近くで見かけることが多い。餌は、カエルや魚、サワガニ、昆虫類など森林内の水辺に棲む小動物である。「キョロロロー キョロロロー」と聞こえるよく響く声で鳴き、その特徴のある鳴声から存在を知ることが多い。早朝によく鳴くほか、雨天や曇りの日には日中でもよく鳴く。繁殖は、森林中の樹洞や

朽木、垂直に切り立った粘土質の崖などに穴を掘って行う。穴は、あまり深くない。まれに、キイロスズメバチの古巣や、民家の土壁に営巣することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地や隠岐諸島などの森林地帯に夏鳥として渡来し、溪流沿いの林内を中心に生息する。サワガニなどが多く生息したり、大径木が多く残っているような豊かな自然環境の存する地域に多い。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、営巣に利用する大木の減少、餌場としていた谷奥部の水田の耕作放棄、カメラマンによる追いかげなど。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○		○		○			○										

ブッポウソウ目カワセミ科

ヤマセミ

Megaceryle lugubris lugubris (Temminck, 1834)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種(亜種)の個体数は多くない上に、魚食性でも主に溪流に依存し、営巣に適した土壁が必要なことなど、特定の生息環境を必要とする。このような場所は、人為的な影響を受けやすいため減少傾向にあり、今後の動向を注意深く見守っていく必要がある。

【概要】

全長約38cm。国内に生息するカワセミの仲間ではもっとも大型。種としては、インドシナ半島北部、中国南部、朝鮮半島、日本に分布する。国内には、本亜種が九州、四国、本州に生息するほか、北海道に亜種エゾヤマセミが分布する。体の上面は白黒の鹿子模様であり、冠羽が目立つ。山地の溪流や湖に留鳥として生息し、水中にダイビングしておもに魚を捕る。飛びながらキャラキャラと聞こえる声で鳴く。1年を通してつがいごとになわばりを持って分散する。積雪期に平野部河川や下流域に漂行する個体もいる。繁殖期は3～8月で、垂直に近い土

の壁に深さ90～140cmくらいの穴を掘って営巣し、新しく掘ったり、古い巣を修復して使用したりする。1つの崖には1～数個の穴が掘られている。

【県内での生息地域・生息環境】

留鳥としておもに山地の溪流や湖などに広く生息が認められるが、生息密度は減少していると考えられる。営巣壁は、河川などの水辺から離れた場所にも存在する。斐伊川・神戸川水系で調査した結果では、営巣に利用する土の壁は、高さが5 m以上で、傾斜は80度以上のものがほとんどであった。

【存続を脅かす原因】

河川改修や開発などによる生息適地(営巣に適した土壁や餌となる魚類が多く生息する溪流など)の減少など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	△			○	○				○	○				△					△